

Building lifestyle around Ferrari

ニュージーランドの空の下で

今号は、編集部ヒライが参加したニュージーランドでのフェラーリ・プロサングエ試乗会が軸となる。タウボ湖のオープンデッキでどこまでも広い空を見ながら、様々な想いが去来した。

この話を知人にしたら、「そもそも忙しくなかったことあるの?」と苦笑いをされた。しかし2023年を振り返ると、過去経験にないほど、本当に多忙な日々だった。5月のGW直後にまとまった休暇を頂き、都合半月ほど休んだものの、それ以外はノンストップで動いていたような気がする。9月末、週末の前後を夏休みとして某地方に出かけたのだが、結局そのホテルでも原稿を書いていたし……。

有難いことだと思っている。中にはヒライ指名で社外から依頼頂いた仕事もあった。念のため書いておくと、現在はカルチュア・エンタテインメントという会社の中にあるネコ・パブリッシング事業部に所属する社員なので、仕事が多くても少なくとも給料は同じなのだが(量より質=売上げということ)、それでもこれだけ仕事があるのは、幸せなことだと思っている。

そんな多忙なタイミングで、ニュージーランドでプロサングエに乗らないかというオファーをフェラーリ・ジャパンさんから頂いた。フェラーリの国際試乗会は599と430スクーデリアに参加したことがあるが、当時はフェラーリ・ジャパン設立前で、試乗会は何と"マラネッロ現地集合"(!)であった。現地ホテルこそ用意されているが、なかなかのパワーワードだ。檜井保孝さんとカメラマンと3人で、ミラノからレンタカーで向かったのをよく覚えている。もちろんいい思い出である。

それ以来の国際試乗会ということで、もちろん即答し、参加するに至った。詳しくは次ページからのレポートを参照頂くとして、実はいい気分転換になるのではないかと、思っていた。偶然にも最近、ニュージーランドに30年以上住んでいた方と知り合いになり、その素晴らしさも聞いていたからだ。

ニュージーランドは、とにかく広がった。物理的な面積ではなく目の前に広がる景色の話で、空も草原も山も川も海も、それらを遮るものがなく、人よりも動物が多く(羊はほとんど見かけず牛がとにかく多かった)、人もクルマもいかに小さな存在であるかを思い知らされた。そこには、東京の小さな部屋に籠って仕事をしているとどうしても忘れてしまう、人として、



人間として基本的で大切なことがあるような気がしたのだ。

試乗を終え、タウボ湖近くにあるリゾートホテルのオープンデッキで、(普段は全然飲まないのだが)促されてシャンパンを飲み始めて、ソファに身体を預けてふと空を見上げたらいろいろな想いが去来し、思わず泣きそうになってしまった(2杯目がよくなかったのかも)。そして、干支が1周するほど編集長を担当してきたフェラーリ専門誌を通じて、いかに"特別な"体験を積み重ねてきたかを、改めて噛みしめる思いだった。そして、この気持ちを形にしなければ……ということで、今回の巻頭特集のテーマ、"特別な体験"が生まれたのだ。

今の状況は有難いし幸せだと思っている。しかしもっと大事なことがあるのではないかと悩んでもいる。ちなみに50歳とは"知命"と呼ばれ天命を知る年だという。まだ11年前に迎えた不惑どころか感いっぱなしだし、天命が何かはわからない。しかし、ニュージーランドの空の向こうに先に天命を終えた人の顔が浮かび……。その先に想ったことは、誌面の仕上がりを通じて感じて頂ければ幸いである。



文 ● 平井大介
text by Daisuke Hirai
写真 ● フェラーリ
photographs by Ferrari S.p.A.
取材協力 ● フェラーリ・ジャパン